『英米文学の精神分析学的考察』第 3 巻出版に寄せて

日本大学文理学部教授　野呂有子

このたび、『英米文学の精神分析学的考察』第 3 巻（サイコアナリティカル英文学会、2016 年 3 月）が上梓された。執筆者全 16 名の内、日大関係者は 10 名である。以下、執筆者名とタイトルを挙げる。（論文掲載順；敬称略）

1. *A Midsummer Night's Dream* における夢の諸相と Freud 理論の一考察　飯田啓治朗
2. フロム理論でチョコレートを味わう―*Charie and the Chocolate Factory* に描写された「二重性」　飯野　朝世
3. *Othello* の精神分析的トポロジー　板倉　亮
4. フィッツジェラルドの二重視点的創作―「アメリカのアダム」の神話と村上春樹の解釈の相違から　岡田　善明
5. Artaud にとっての Shakespeare 作品―Thèâtre de la cruauté としての *King Henry IV*, Part　上滝　圭介
6. *The Rape of Lucrece* 試論―Lucrece は「眼差し」の中に何を見たのか―　関谷　武史
7. *As You Like It* 試論―Arden の森における若者たちの恋愛を巡って―　堤　裕美子
8. *Richard III* における "the true hero / the intended audience"　野呂　有子
9. 演劇的自意識のドラマツルギー――*A Midsummer Night's Dream* における二つの想像力　松山 博樹
10. 王子と乞食のパラノイア―ラカン的解釈から見た *The Prince and the Pauper*　鈴木　孝

次に各論文の内容を手短に紹介する。

１は、William Shakespeare(1564-1616)による、*A Midsummer Night's Dream* (1595)が精神分析学者 Sigmund Freud(1586-1939)に与えた影響の可能性を大胆に探った論文である。まず、当該作品における夢の諸相を考察し、次に、フロイトが当該作品をどのように扱っているか、フロイトの著作全集の英語訳版を資料として、当該作品についてのフロイトの言及を検討している。そして最後に、当該作品に見られる、フロイトの夢理論に通じると考えられる台詞を考察している。そして、『夏の夜の夢』という劇が、タイトルだけではなく、精神分析額的な夢の観点からも、まさに「看板に偽りなし」の作品だと結論づけている。

２は、Roald Dahl（1916-90）による *Charie and the Chocolate Factory* (1964)に登場する子供たちの性格造形に焦点を当てて、Erich Fromm(1900-80)の理論の視点から、現代資本主義社会に潜在するとされる常態性病理現象が、作品および登場人物の描写にどのように当てはめて分析することが可能であるのかを探っている。作品世界の持つ「二重性」を

背景にして、解釈し、五人の子どもたちのそれぞれの描写に、フロムの提唱する性格分析が的確に当てはまめられることを明らかにした興味深い論文である。

３は、精神分析的批評、（新）歴史主義的批評、（ポスト）コロニアル批評、フェミニズム批評などの視点から、様々な解釈を生み出してきた、シェイクスピア作 *Othello*（1604）という劇を、「書かれたテキスト」として構造的に分析し、その構造が、現在そのテキストを読む読者たちとの関係において、どのように顕在化するのかを考察する。最終的に、主人公が社会から疎外されていくプロセスと「自己疎外」のプロセスが並行関係にあることを鋭く指摘している。

４は、Francis Scott Key Fitzgerald（1896–1940）による、*This Side of Paradise*（1920）、*The Great Gatsby*（1925）、*Tender is the Night*（1934）の三作品中に、作者の潜在意識下にあるアメリカの夢を具現する innocent な精神が認められることを確認した論文である。その際、作者の二重視点的な創作内容を論及し、フィッツジェラルドの作品を日本語に翻訳した村上春樹がどのような作品解釈を行なっているかについても言及している。そして、作者が物質的、享楽的価値観に翻弄される人々を描きながらも、その対極にある堕落以前のアダムの innocent な価値観の重要性を暗示していると結論づけている。

５は、20 世紀前半にフランスの文学界で活躍した Antnin Artaud(1896-1948)が提唱した、Thèâtre de la cruauté (残酷劇)に着目し、彼がシェイクスピアの作品群―特に、*King Richard II*―を好んで朗読した事実に触れた後、*King Henry IV*, Part I（1597 以前？）中に、Artaud の主張する「残酷劇」の要素が認められる可能性を詳細に探った野心的な論文である。そして、最終的にアルトーは、『ヘンリー二世』を前史とした、Henriad 全作品に対して「残酷劇」の可能性を感じていたと示唆する。研究の継続に期待したい。

６は、シェイクスピアがペストの猛威を避けて、パトロンの Southampton 伯爵のもとに滞在した期間（1592–94）に、伯爵に献呈した *The Rape of Lucrece* の概要と詩物語の「食い違い」に着目し、その理由を究明しつつ、作品を詳細に検証した論文である。その過程で援用されるのは、ラカンの mirror stage 論、および、ヴェルギリウス（紀元前 70–紀元前 19）作『アエネーイス』である。最終的に女性主人公を自害に追い込んだのは、周囲の男性たちの冷たい「眼差し」であり、彼女の悲劇的な自害の孤独性を強調するところに作者の意図があったのではないかと述べる。つまり、そこにこそ、社会的 minority として貶められる女性たちに対する作者の共感の眼差しがあると論者は指摘する。

７は、シェイクスピア作 *As You Like It*（1600）における、主要登場人物である Rosalind と Orland の恋愛を巡るプロットに焦点を当てて、若者たちが故郷を追放されて、森の中に迷い込みながらも、恋愛を通して自己確立を試み、精神的に成長する過程を Eric H. Erikson(1902-94)の青年期の精神分析理論を援用して分析している。そして、『お気に召すまま』では、Arden の森は「人間の一生の中でもとりわけ特殊で大切な児童期と成人期の間に位地する青年期を象徴しており」、成人になる前の「猶予期間」の中で、登場人物たちが恋愛を通して自己を確立し、他者との関係を確立する過程を経て、結婚に至る成熟の過

程が巧みに描かれていると結論づけている。

８は、Elizabeth I の治世において、追いつめられるカトリック勢力と、権力を増すプロテスタント勢力の拮抗という、英国の政治的コンテクストの中で、＜シェイクスピア隠れカトリック説＞を基盤として、Richard３世像造形の戦略を分析・究明する。そして、表向きには、時の為政者エリザベスとテューダー王朝の正統性と権威付けを意図して上演された『リチャード三世』が、実は、プロテスタント政権の強奪と迫害に呻吟する、（隠れ）カトリックの人々への励ましと共感の込められた作品であることを明らかにする。つまり、本作の“the true hero”は、エリザベス政権のもとで炙り出され、迫害された、カトリックの殉教者たちであり、作中に登場する女性たちの抱く、犠牲者に対する嘆きと哀悼には、シェイクスピア自身の抱く、カトリックの同胞に対する嘆きと哀悼が二重写しになっていると結論づけている。

９は、『夏の夜の夢』の登場人物たちが、認知レベルに応じて、同心円状の層に区分されるとする David Young の批評を念頭に置きつつ、想像力および世界認識という問題について分析した論文である。さらに、これら登場人物の世界認識の問題が、本作品のメタドラマ性（＝演劇的自意識）と強力に連結していることを精神分析的立場から検討している。そして、劇場において、硬直した社会を変革する可能性を持つ存在としての観客に言及し、演劇的自意識を体験した観客自身が、妖精パックの働きかけを通じて、見られる側へと変容し、自ら想像する力を持つに至ると結論づける。本劇作品の持つドラマツルギーは、観客を魅了し、自ら現実世界で演技者（＝行為者）となる力を与える、メタドラマ的入れ子構造を持っているという、示唆に富んだ指摘を行なっている。

10 は、Mark Twain(1835-1910)による、*The Prince and the Pauper* (1881)が、児童文学作品の作を超えた深刻なテーマ―例えば、「遺伝か、環境か」という Charles Darwin(1809–82)の進化論的問題―をも描き込み、「アイデンティティとは何か」というテーマに鋭く切り込んだ作品であることを指摘している。さらに、ラカン的視点から本作品を解釈し直すことによって、読みの可能性を広げることに挑戦した論文である。そして、アイデンティティ探求の旅は、物語の happy ending を以て終わるのではなく、人間存在に必然的に伴う狂気を内包しつつ、永遠に続かざるを得ないものであると結論づけている。

以上から明らかなように、本書の執筆者のほとんどが、関谷学派の流れを組む方々であり、関谷先生の学的薫陶が、時を経て、今まさに満開の花を咲かせたことが実感される内容となっている。これは、日本大学大学院文学研究科英文学専攻において、関谷武史先生の残した確かな足跡の一例と言ってよい。これから、これら新進の気鋭が、さらに多くの人々に精神分析学的な英米文学作品―シェイクスピア作品に限らず―の読解を広めていくことが予感される。

また付言すれば本書第２部、アメリカ文学において、全五篇の内、Nathaniel Hawthorne(1804-64)による、*The Scarlet Letter* (1850)を論考対象とした論文が二本掲載

されており、改めて本作品の解釈の可能性の広がりを認識する結果となった。本研究科英文学専攻には、長い伝統を誇る、ホーソン研究の流れも力強く脈打っていることを申し添えて筆を置くこととする。